

第 62 回文化ゼミナールに参加して (H. Hayashi) [J]

2023 年 3 月 7 日から 11 日までの 5 日間、慶應義塾大学の日吉キャンパスにて第 62 回文化ゼミナールが開催された。コロナ禍に対応した二度のオンライン代替企画を挟み、対面での実施は、2019 年 3 月以来、約 4 年振りになる。私のような九州の学生にとっては地理的距離から解放される遠隔実施もありがたかったが、普段の日常から切り出された島のようなところへ行って勉強するのも、体験として記憶に残りやすいという良さがある。かつての「蓼科ゼミ」は私にとってまさにそうした場所だったのだが、今回横浜での開催となったのは、かの地へ戻る一步手前ということなのだろうか。以下は気楽な一参加者のレポートにすぎないが、久方ぶりの対面開催となった本会の、せめて雰囲気だけでも伝えられれば幸いである。

文化ゼミでは毎回枠となるテーマが設定され、そのもとで招待講師の講演、参加者の発表、グループワーク(Gruppenarbeit)、映画鑑賞等のプログラムが組まれる。使用言語はすべてドイツ語である。今回のテーマは »Literatur, Ästhetik und Ökonomie — Poetiken des Wissens«。改めて見直すと、枠となるこれらの概念——文学・美学・経済、そして詩学と知識——は相互に微妙な緊張関係にあることがわかるのだが、当初はこのテーマのもとで何が問題になるのか皆目見当もつかないまま、ただただ「経済」という不穏な響きへの怖れとともに参加を希望した。グループワークに向けて事前に送られてくる計十六のテキスト(この中から四つを選択する)はハウフやトーマス・マンからルカーチ、現代作家のカトリン・レグラにいたるまで多岐にわたり、追加の参考資料も豊富である。もしもこれが「市民社会のエコノミー」、「マルクスとモデルネ」、「労働と生産」といった魅力的な小テーマによって分けられていなければ——特に自分のような不勉強な学生にとって——まさに分け入りがたい森の観を呈していただろう。ハウフの『冷たい心臓』を「労働と生産」という観点から読むと何が見えてくるのか、これら多彩なテキストは、「経済」を媒介としてどのように繋がっているのか？ どのグループに参加希望を出すか予習と並行してあれこれ悩むのは、個人的な文化ゼミの楽しみのひとつでもある。

ゼミの初日は実行委員長の糸川先生の挨拶とともに幕を開け、つづけて招待講師のヨーゼフ・フォーク教授(ベルリン大学)の基調講演が行われた。先生は近・現代文学のほか、知の歴史と理論、ディスクールとメディア理論、金融・権力・リスクの現代史など多角的な研究をおこない、日本では『資本の亡霊』の翻訳がある。今回の講演の内容は、近代の人間を 17 世紀以降に発見された「経済的人間」という観点を通じて歴史的に検討するきわめて浩瀚なもので、話題はニーチェにおける「動物」に始まり、啓蒙主義期の人間観を経て、現代の金融資本主義社会におけるリスク・マネジメントにまで及んだ。経済的人間とは、古典経済学のもとで生み出された新しい人間像であり、「見えざる手」による市場の調整システムのもと、各人の私益を追求し、まさにそれによってシステム内で機能する一個のプレイヤーである。経済的人間の行動を導くのが道徳ではなく利益であるとすれば、経済的人間の視

界に映るのは損得計算に制限された、それゆえに安定した世界である。数によって割り切るこのことができるこうした世界は、もっとも広い意味での文学的实践、すなわち一日分の貸借帳への書き込みによって表される。経済的人間は、複雑な、解釈不可能な出来事の連鎖の中に埋め込まれ、にもかかわらずそのうちで自足した合理的世界を紡いでいる、一人のロビンソン・クルーソーにたとえられる——講演後の質疑応答含め、巨視的に広がっていくフォーゲル先生の語りをここに要約することは自分には不可能だが、全体を構成する個々の議論は驚くほど明晰であり、その射程の広さにおいてまさに基調講演の名にふさわしい内容であった。

二日目以降の研究発表では、日本全国のみならず韓国や中国からも集まったドイツ文学の研究者たち、そして学生たちが、老若男女を問わず、上記テーマのもと国際色豊かな議論を繰り広げた。発表のレベルはもとより、時に軽やかな笑いあり、時に厳しい指摘ありで寄せつ返しつしながら進んでいく質疑応答の質も非常に高く、印象的な瞬間が会場には何度も訪れた。今回は質疑応答の際に質問者が手元のメモ紙にドイツ語で質問の概略を書き、それをあらかじめ提出するという方式が採用され、この仕組みが全体の意見をすくいあげるのに役立っていたように思う。大勢の前で質問をすることはやはり緊張するので、発言の前に書くというワンクッションが入るこの制度は、個人的にもありがたかった。

研究発表と並んで文化ゼミの柱になっているのは、やはりグループワークであろう。グループワークでは、人とテキストに対する距離が全体発表よりも格段に近くなり、その意味でいっそう密な議論が交わされる。また、どのグループに参加するかは先に述べた通り選択式なので、参加者によって歩く道りが変わってくる。私の場合、初日に参加したのはハウフ『冷たい心臓』であった。シュヴァルトヴァルトに住む炭焼きのペーターが、キャリアアップと一攫千金を夢見て地霊との怪しげな取引に乗り出すこの物語には、平穩質実を旨とするビーダーマイヤー調のメルヒェンのいわばネガとして、資本主義の妖怪がそこそこに顔をのぞかせる。ペーターの憧れの的になっているのは、ライン川の彼方、当時資本主義経済の最先端にあったオランダであり、あるいはそこでの取引で成り上がった旦那衆であり、あるいはそこから流れてくる、魔法のように増殖し、「煙」のように消え去る金＝貨幣である。この、確かな手職か泡のような金かという対立は、二日目に議論した『ブッデンブローク家の人びと』において、今度は主人公の一人であるトーマスの前に実直な商人と魔術的な投機家という対立に形を変えて現れるのだが、その結末はハウフとは真逆である。このリアリズムを盾にして表現主義の「表層性」を批判するのが三日目に議論したルカーチ『リアリズムが問題だ』であり、こちらでは経済的・物質的な社会機構の因果をとらえる必要が強調されたかと思うと、四日目のレグラ『私たちは眠らない』ではそうした俯瞰的視点が消失し、労働はもはや炭焼きペーターのような個人主体によって担われるのではなく、組織を運営する不特定の「私たち」にとってかわられる。

いま振り返ると、議論そのものは何を話したかはさっぱり覚えていないが（特に楽しかった議論にそれが多い）、議論の合間や議論が終わった後、帰り際に少しだけ参加者と話した

ことが妙に記憶に残っている、ということがある。そうした埋め草の時間が豊富にあることは、対面開催の特徴のひとつに挙げられるかもしれない。あるグループワークの休憩時間に、持参していた独和大辞典が中国の先生の目に留まり、その場でひとしきり辞書談義に花が咲いたことがあった。先生は分厚い辞書を手に取り、頁をめくってその感触を確かめていた。今回のゼミをきっかけにマルクスを読んでみると、物には使用価値と交換価値の二種がある云々と書かれている。あの瞬間、私の辞書がいかなる「価値」を帯びていたかについて、マルクスがどのような分析を下すかは、興味のある問題である。

今回の文化ゼミは、久しぶりの対面というだけでなく、初の慶應大学日吉キャンパスでの開催という点にも特色があった。伝統的な開催地である長野県の蓼科と日吉とで大きく異なるのは、やはり会場の立地であると思う。容易に出歩けない山上のホテルと、すぐ近くに駅があり、駅の向こうに繁華な学生街がある大学とでは、単にゼミ外の行動範囲だけではなく、ゼミに流れている空気そのものが大きく異なっているように感じた。蓼科で感じられるのが密閉された濃密な空気であるとするれば、風通しの良い日吉キャンパスにはそれとは性質の異なる開放的な空気が流れている。ゼミの緊張から解放され、教室を出てイチョウ並木の坂を下り信号を起点にして駅へと流れていく道のりにはなにかタテシナらしからぬ高揚感があった。喫茶店で先輩や後輩と明日のゼミの読み合わせをし、偶然見つけた古本屋で古書を買った。そのまま学内の宿舎に帰る人もいれば、市外に宿を取っているので電車で帰っていく人もいた。こうして書いてみるとなんということはないが、いずれも、従来の蓼科ゼミ、あるいはここ数年続いていたオンライン形式でのゼミにはなかった光景である。いずれの場所にも独自の色があり、互いに交換可能ではない、ということは重要に思える。同時に、文化ゼミがその豊富なプログラムをさらに超えて、奥行きや時間の流れを持った活動であるということを、改めて実感する。

もちろん、そうしたなかで変わらないものもあった。まずは、招待講師の講演、発表、ワークショップ等での、参加者による議論の熱気や緊張感。最終日には、それまでの口頭発表やグループワークにおいて誰よりも熱心に発言をし、議論を導いていたフォーグル先生がふたたび壇上に上がり、全体の総括が行われ、第62回文化ゼミナールは盛況のうちに幕を閉じた。あるいはまた、先達と同輩の姿や言葉に実際に触れておおいに刺激を受ける文化ゼミならではの経験も、変わらずそこにあった。そしてなにより、ゼミの根幹をなす組織委員会の準備とサポートが、今年も手厚かった。コロナ禍により依然として情勢の見通せない中、力を尽くして貴重な知の交流の場を作ってくださった実行委員会の方々に、改めて心よりお礼申し上げたい。ありがとうございました。

林 弘晃（九州大学博士課程）

0197

作成日 : 2023/10/15